

あざけるような由佳里の言葉にすら、今の紗耶子は悦びを覚えてしまう。

「それじゃあ、そろそろ本格的なお仕置きに入ろうか。僕もそろそろイキたいしね」
「っ!？」

紗耶子の頭を押さえていた手に力がこめられた。これからなにをされるか悟った紗耶子の目が大きく見開かれる。

（く、来るっ！ ご主人様のが、私の奥に……っ）

その瞬間、喉を貫かれるような衝撃が襲ってきた。息がつまり、呼吸ができない。勝は軽く突いただけだったが、それでも紗耶子の目には涙が浮かんた。

「かはっ！……ぐふっ！」

咳きこむが、それでも歯を立てないよう必死になってこらえる。

（噛んじゃダメっ！ ご主人様のコレ、絶対に噛まないようにしないと！）

えずきながらも、なんとか歯を立てずにディープスロットを受けとめる。先端が喉を軽く押しているだけでも苦しい。もしもこのまま激しく動かされたらどうなってしまうのか、想像するだけで恐ろしかった。

「……もう慣れただろ？ そろそろ動くよ、紗耶子」

「ヒッ!？」

紗耶子の顔が初めて恐怖に歪む。

(こ、これ以上奥を突かれたら死んじゃう！ イヤ、やめて！)

わずかに動く首を左右に振って拒絶の意を示すが、

「だめだ。忘れたの、これはお仕置きなんだからね。出来の悪いメイドには、身体で覚えてもらわないと」

「ンンッ！」

お仕置きと言われただけで、ビクリと脂汗まみれの身体が震えた。脅えていた顔に、期待の色が再び滲んでくる。

(そうよ、これはお仕置きなの。ずっと夢に見ていた、ご主人様による激しいお仕置きなのよ。こらえなくっちゃ。どんなに苦しくてもつらくても、私はメイドなんだから、最後まで我慢しなくちゃいけないの！……)

紗耶子に覚悟ができたのを確認してから、勝が腰を前後に振りはじめた。口ではご主人様らしく振る舞っているが、実際は紗耶子が望むプレイを演じているにすぎない。

もつとも、美しく清楚な顔を苦しげに歪める紗耶子の姿に興奮しているのもまた事実で、勝の動きは次第に激しさを増していた。

「んぐっ、ぐっ、ぶぐうっ！ ンン、んぐっ、けほっ!!」

逃げることを許されず、激しく喉を犯される苦しさに、紗耶子はただ涙を流して身悶えることしかできない。なのに、身体の火照りは増すばかりだ。

（おかしいよ、私、こんなにひどいことされてるのに、どんだん頭のなか、真っ白になつてくのお！ 息ができなくて苦しいのに、どうして、どうしてアソコが気持ちよくなつてるのっ!?)

涙と汗、そして涎よたれまみれの顔に、いつしか喜悦の表情が浮かぶ。ワレメに沿って指を激しく動かし、いつの間にか剥きだしになつた陰核を押しつぶすように転がす。

（オナニーしてる、ご主人様にお口犯されながら恥ずかしいオナニーしてるう！ オマ×コからエッチな汁垂らしながら、私、変態オナニーしちゃってるよお！）

あれほど苦しかったデープスロットも、いつしか心地よい息苦しさに思えてくる。確かに呼吸はしづらいが、深々と貫かれているという感覚はマゾの紗耶子には快感ですらあった。唾液をだらだらとこぼしていることにもかまわず、口を犯している勃起に舌を絡ませる。

（ああ、ご主人様のオチン×ン、美味しい……）

先走り汁だろうか、明らかに勝の肉棒の味が変わっていた。大きさも硬さも増しているようだ。



「ああ、いいよ、紗耶子の舌、すごく気持ちいいよっ」

ついに勝が快感を口にした。

(嬉しい……私、ご主人様にちゃんとご奉仕できてる……あつ、やだ、アソコが……オマ×コがどどん濡れてきてる……お仕置きされてイッちゃうの……っ?)

膣口から白く濁った体液が溢れてくる。

「ご主人様、そろそろ出そうですか?」

勝の耳もとで由佳里が囁く。

「う、うん、紗耶子の口のなか、あつたかくてぬるぬるしてて、すごく気持ちいいんだ……ああつ、そ、それに、喉の奥に当たるたびに見せるつらそうな顔が綺麗で……あうっ!?!」

いきなり耳たぶを噛まれた勝が悲鳴をあげる。

「……ご主人様、次は由佳里が同じことをしてさしあげますから……さつさとイッてくたさいませ。由佳里も、これ以上見ているのはつらいです」

拗ねたような、それでいて甘えるような声。

「だから……ご主人様がイけるよう、由佳里もお手伝いいたします」

「うひっ!?! ゆ、由佳里さん……ああっ!」

由佳里は勝の耳孔に舌を忍びこませると同時に、両手で勝の乳首を指で転がしはじめる。早く射精させて、次は自分が奉仕するつもりのようなようだ。

「んぶっ！　ンッ、んぐううッ!!」

由佳里の奉仕に煽られた勝の腰が激しく紗耶子の喉を叩く。奥を突かれるたびに気が遠くなるような息苦しさに襲われるが、そのつらささえも今の紗耶子には絶頂へのステップでしかない。

「ふぐっ、ぐっ、んぐうううっ！　んぐっ、ぐっ、んんんうっ!!」

だからだと唾液を溢れさせながら、紗耶子は恍惚の表情で自慰に耽る。まるで失禁したかのように濡れそぼった秘部からは、ぐちよぐちよと大きな水音がたつ。

(アア、イク、お仕置きされながらイツちゃう！　ダメ、もう……もうダメえ！)

「さ、紗耶子……ぼ、僕もそろそろ……うああっ」

勝がラストスパートに入り、乱暴に喉の奥を凌辱される。

「ぐっ……ぐう!?　ぐっ……かはッ!!」

その激しいディープスロートにむせた拍子に、紗耶子は亀頭に軽く歯を立ててしまった。だが、それが最後の引き金となった。

「出る……出すよ、紗耶子……ぐううッ!!」